

世界への約束 葦山反射炉を未来へ

葦山反射炉世界文化遺産登録決定

特別号

市役所世界遺産推進課
☎ 055-948-1425

7月5日、伊豆の国市の歴史に大きなページが刻まれました。

ドイツのボンで行われた第39回世界遺産委員会で、葦山反射炉を含む『明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業』の世界文化遺産登録が決定しました。市のシンボル『葦山反射炉』が世界の宝として認められたのです。この瞬間を、市民が、そして葦山反射炉の保存に尽力した多くの先人が待ち望んでいました。

しかし、登録は決してゴールではなく、あくまでも新たな使命を担うスタートです。地元に住む私たちは、それら使命を守り続けることを、世界に対し約束したのです。

『葦山反射炉を未来へ』。世界文化遺産への登録を機に、ここ伊豆の国市に住むことに誇りを持ち、これからも葦山反射炉を大切に守り継いでいきたいと思います。

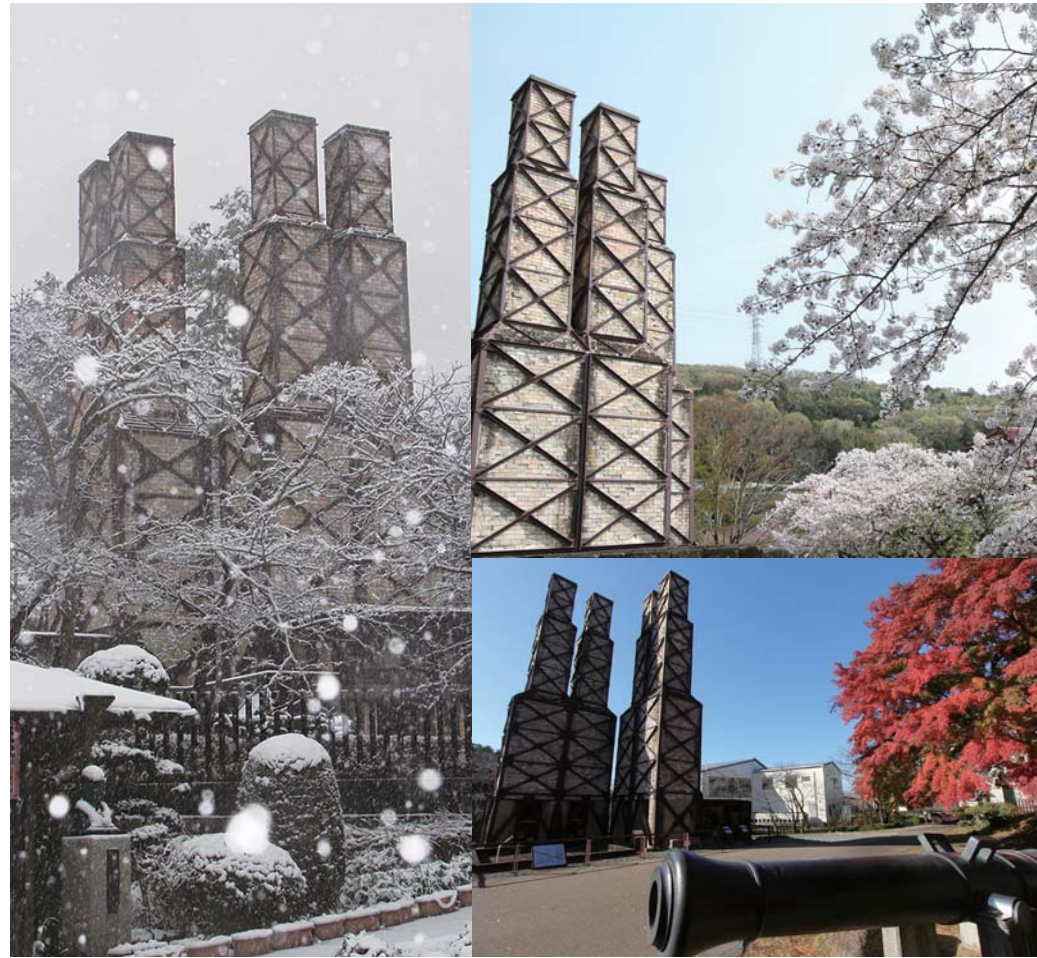


さまざまな

顔をもせる

世界の宝

葦山反射炉



明治日本の産業革命遺産における「顕著な普遍的価値」

九州、山口、岩手、静岡に分布する一連の産業遺産群は、西洋から非西洋国家に初めて産業化の伝播が成功したことを示しています。19世紀半ばから20世紀初頭にかけて、日本は製鉄・製鋼、造船、石炭産業を基盤に急速な産業化を達成しました。一連の資産は、1853年から1910年までのわずか50年余りという短期間で、この急速な産業化が達成された3つの段階を反映しています。

第一段階は、1850年代から1860年代前半にかけての幕末期で、製鉄や造船の試行錯誤期でした。国防、特に海外からの脅威に対する海防を強化する必要から、各藩が西洋の技術書や事例の模倣により（直接ではなく）二次的に知識を得て伝統的な匠の技と組み合わせ、産業化を進めました。

第二段階は、明治時代に入ってから1870年代前半で、西洋技術およびそれを実践するための専門知識を導入した時期でした。

最終段階である明治後期（1890～1910年）の第三段階は、国内に専門知識が蓄積され、西洋技術を積極的に改良して日本のニーズや伝統に適合させることにより、本格的な産業化が達成されました。

イコモスによる調査

世界遺産登録を決めるユネスコ世界遺産委員会は、文化遺産を評価する場合、イコモスに資産の評価を委託します。

イコモスは、世界遺産委員会の前年3月ころから約1年間をかけて調査を行います。各国から提出された登録推薦書や管理保全計画を基に、「顕著な普遍的価値」を見分けるための登録基準に合致しているか（価値）、そして、登録以後、その価値をしっかりと保護・管理する体制ができていくか（保全）について審査します。

その審査の一環として、平成26年9月から10月にかけて、「明治日本の産業革命遺産」のすべての構成資産で、現地調査が行われました。



イコモスによる現地調査 (H26.9.26)